

「なんのために生まれて、なにをして生きるのか、答えられないなんて、そんなのはいやだ」。「アンパンマンマーチ」（やなせたかし作詞）の歌詞です。未熟児で生まれ、体力、才能、容姿に対してコンプレックスを持ち、敗戦の祖国へ引き上げた時には何の希望も持てず、漫画家としてデビューしても周りは天才・鬼才・異才がひしめいてとても敵わず、更には病弱多病で前途は真っ暗、それゆえ「何のために自分は生きているのか」がずっと分からないでいた…そんなやなせさんの苦悩が重ね合わされています。しかし、紆余曲折を経て、詰まるところ人生の最大の喜びは人を喜ばせることだと気付いた時、とても気が楽になったと語っておられます。

ドイツの哲学者ニーチェは「なぜ生きるのかを知る者は、いかに生きるかに耐えることができる」と語りました。その点で言いますと、本日の「あなたがたは地の塩、世の光である」というイエスの言葉には救われます。地の塩、世の光に「なりなさい」と言われたのではなく、「である」と宣言なさったのです。「塩」は、生命を保ち、腐敗を防ぎ、味わいを添え、「光」（灯火）は人の心と体をあたため、闇夜を照らします。そんな、人が生きていくために必要不可欠な存在として、誰かの命を支えるために私たちは生きていることをイエスは示されたのでした。その様な美しい存在として私たちをご覧になっているイエスの眼差しは、嬉しい反面、嘆かわしい自分の姿との落差に戸惑いを感じざるを得ません。そんな時、イエスが「塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう」（13節）とか、私達が自分の光を人々の前で輝かすのは、それを見て「人々が…あなたがたの天の父をあがめるようになるためである」（16節）と言われていることに目を向けたいと思います。私達に塩気や輝きを与えるのは、私たち自身ではなく、イエス・キリストなる神であることが伝わってきます。

イエスは、やがてご自分を見捨て、十字架の前で泣き崩れることになる弟子達の姿を見据えた上で、彼らを地の塩、世の光と呼びます。十字架を前に露わにされた嘆かわしいほどの自分達の姿…しかしその十字架によって与えられる塩気と輝き、胸の痛みを抱える弟子達こそ、他者を生かす「地の塩、世の光」であるとイエスは宣言なさるのです。「そうだ、嬉しいんだ生きる喜び。たとえ、胸の傷が痛んでも。ああ、アンパンマン、優しいきみは、行け、みんなの夢守るため」…アンパンマンマーチの続きの歌詞です。「優」という漢字は、「憂い」を内に抱える「人」を意味しますが、やなせさんにとって人を喜ばせる力とは、誰もが抱えている胸の傷、その痛みから生まれてくる優しさのことでありました。

（文責：望月達朗牧師）

